5

子育てと助産師のキャリアの両立：クリニックという選択

前田津紀夫
前田産科婦人科医院 院長

POINT

1. 産科診療所（クリニック）における助産師の業務を紹介します！
2. 産科診療所に勤務するメリットは？ デメリットは？
3. 身近なお産の場として産科診療所には助産師の力が必要です！

はじめに

筆者は東京の大学病院，地域の公立病院の勤務医を経て1993年静岡県焼津市に産科診療所を開設しました。それまでのキャリアのなかでは一貫して分娩を取り扱う施設に勤務し，分娩と向き合ってきました。そして周囲にはいつも助産師がいました。

大学病院の研修医時代，ともに産科の正常経過を学んだのも大学病院の附属助産婦学校（名称は当時）の学生たちでありました。このような環境で産科医としてのキャリアを積み上げてきたため，筆者の頭のなかで描く分娩風景には助産師が登場するのが自然だったのです。

ところが開業を思い立ったとき，助産師がなかなか就職してくれない事実に直面しました。当時，これはショッキングなできごとでした。今でこそ助産師の職員に恵まれていますが，そんな日が来るまでに約10年を費やすこととなりました。

産科診療所が日本の周産期の一端を支えていることは疑う余地がありません。その産科診療所が助産師に恵まれないという事実は何としてでも改善していきたいと思います。今回はこのような意識を持ってこのお仕事を引き受けさせていただきました。現在の職場では満足できない，あるいは職場を一時は離れたのだけれど，お産の現場に復帰したい助産師たちの再就職に際して拙文が少しでも参考になれば幸いです。

当院看護職員の構成の変遷

2013年7月現在の当院の職員の構成は助産師11名（常勤8名，非常勤3名），看護師11名（常勤10名，非常勤1名），准看護師1名（非常勤），看護助手3名，管理栄養士2名，栄養士1名，調理員5名，事務員4名，医局事務4名です。振り返ると1993年9月の診療所開院の際には看護職員は助産師1名（60代後半），看護師5名，准看護師2名でスタートしており，構成員の数や質の変化には隔世の感があります。開業当時，助産師は1名も獲得できず，ようやく他の市立総合病院を定年退職し家庭に戻っていた60代後半の助産師を1名採用することができました。

参考までに，当院の11名の助産師の年代，過去の職場歴，お子さんの年齢と数を表1に示します。

表1 当院の助産師の勤務形態と家庭背景

	年代	勤務形態	子ども	現在までの職歴	取り扱った分娩数（2012）
A	50代	常勤	なし	都内総合病院→産科診療所→当院	140
B	50代	常勤	成人1/専門学校生1	近隣公立病院→育児→当院	78
C	40代	常勤	専門学校生1/高校生1/中学生1	近隣公立病院→当院	101
D	40代	非常勤	中学生1	近隣公的病院→当院	32
E	40代	常勤	高校生2/中学生1	近隣公立病院→主婦→助産所→当院	20
F	40代	常勤	中学生2/小学生1/幼児1	近隣公立病院→当院	49
G	50代	常勤	なし	近隣公立病院→主婦→当院	67
H	50代	常勤	大学生2/高校生1	近隣公立病院→育児→当院	0※1
I	40代	非常勤	大学生1/高校生2/中学生2	近隣公立病院→育児→産科診療所→当院	0※1
J	60代	常勤	成人1	都内総合病院→近隣公立病院→当院	175
K	40代	非常勤	小学生2	近隣公立病院→育児→当院	0※2

※1就職したばかりのため
※2外来勤務が中心のため
取り扱った分娩数の平均は助産師一人あたり73.5人（H・Iを除いて計算）